

昭和五十七年七月一日 第三十種郵便物認可
平成四年七月一日 第三十種郵便物認可
月刊誌 沖 創刊第百九号

沖

俳句雑誌「おき」

7
月号

沖
発行所

シンセサイザー

能村 研三

国語学会に参加して

恰好な曇り加減に桐咲けり

緑雨なか連れ灯りせる街路灯

ざんざ降り酔ひそこなひし竹もあり

朴一花親身の空の高さかな

先日、日本国語学会が主催するシンポジウムのパネラーの一人として参加した。会場は九段の二松学舎の講堂。基調講演は詩人の高橋睦郎氏。パネラーは私の他に歌人の三枝昂之氏、二松学舎学長の今西幹一氏、日本歌人クラブ会長の神作光一氏と錚々たるメンバー。テーマは「これからの文学研究・語学研究近代詩歌をめぐって」で主に歌人の文学研究が中心であったが、私は研究者ではないので俳句の実作者の一人としてまた文化行政に携わる者の立場から意見を述べさせていた。

学者の研究というと私とは縁遠いので、俳句と評論活動について話をした。その内容を少し紹介すると、俳句においても、本質的な評論活動は乏しい時代で、近年は、実作者と評論家という二面性を持ち備えなくなり、実作が優れていても評論は駄目、これとは逆に立派な評論をしても実作が伴わないという場合が多い。

現代俳句の系譜を思い起してみると、子規の時代の碧梧桐、花鳥飄詠と新興俳句、虚子と秋櫻子、近年になつてからは伝統俳句と無季を容認

半夏生くすぶるものを土で消す

中山法華経寺五重塔・二句

改修の若葉沈めの五重塔

見そなはず塔の心柱五月闇

正論をあくまで通す初蚊遣

輪生の葉つなぎに巻く朴葉餅

流れくるシンセイザイザー黴育つ

する前衛俳句といった対立軸があつて、それが牽制しながらお互いの成長を促がしてきた。

私の俳句の師系譜を見ても、父登四郎の師は秋櫻子、そのまた師は虚子ということになるが、虚子と秋櫻子においても虚子は花鳥諷詠を唱え、それに反発しながら秋櫻子は「自然の真と文芸上の真」を唱えた。秋櫻子と登四郎においても、際立った対立軸はなかったものの、自然諷詠の中に一段と心境を深めた秋櫻子に対して、俳句においていかに人間を描くことが出来るかといったヒューマン姿勢を打ち出した。

最近の俳壇において、熱い論争が行われなくなった原因の一つに、師弟関係の希薄化ということも考えられる。

昔のような師の門を蔽くといったことも行われず、師との熱い関係というものが薄らいできていたため当然対立軸というものも見失われたように思う。



能村 研三

ゴーギャンの色

林 翔

忘 春

「忘春」という熟語は、大歳時記にも無いし、国語大辞典にも漢和大辞典にも無い。つまり、造語なのだが、私には忘れられない熟語なのである。

忘春のころ あはれに 病みてをり。能村登四郎を思はざらめや

牛尾三千夫

沖晴れの日々重ね 今日登四郎忌

下草に樹は影頷ち風五月

紫陽花や心移りは人もして

花火一瞬あと巨いなる沼の黙

登四郎氏と私が国学院大学で同級だったことは読者も御承知と思う。しかし登四郎氏は病気で休学し、私より一年遅く卒業した。二人とも大時代は短歌雑誌の同人であったが右の牛尾氏は同じ短歌雑誌「装填」の先輩同人。登四郎氏とはどこかウマが合ったらしく、非常に仲が良かった。

健康な人ならば、たとえ晩春の頃であろうと春を忘れることは無い。しかし病床に横たわって天井ばかり見つめている青年は、春が過ぎ去ろうとしていることにも気付かないの

向日葵に俯向きどきの来りけり

覚悟もて折れゆく道や片蔭無し

かむりゐる帽を突き刺す蟬時雨

のたうてる姿に燥き蚯蚓死す

ゴーギャンの色に咲きけりハイビスカス

これ以上大きい字は無し「かき氷」

だろうという推測を、「忘春」という造語で三千夫氏は表現したのだろうと思う。

三千夫氏にせよ登四郎氏にせよ、短歌を始めたきつかけは、当時の国学院大学には高名な折口信夫しのぶ教授が居られたからであり、折口博士の歌人としての筆名は釋道空であった。

道空歌集『海山のおひだ』を登四郎氏も私も貧り読んだものである。

「装填」は三階の書庫にあるが、今は三階に上る元気が無い。登四郎氏の一首を思い出すままに挙げる。行徳へ。通ふ夜船に降る霧の、そうそうと音 明るかりけり

登四郎

林 翔



蒼茫集

火の揺れ

安居正浩

葉桜のおもさは定年の重さ
番地まだ乙の字残る花卯木
火の揺れは心のゆらぎ薪能
一面の菜の花自白したくなる
ぼうたんに正室めきしゆとりあり
春雨や消えし昭和と燐寸箱

師 影 北川英子

行く春の沖遠からぬあたりかな
緑さし眼光炯炯忌の師影
森は音洩らさぬやうに抱卵期
一途に田へ走る水音五月来る
卯の花腐しもとよりこれは濡れせんべい
片虹の未完の空へ離陸せり

火 輪

大畑善昭

落椿風の火輪となり走る
幌大き熊谷草の男寂び
熊ん蜂墜ち命終の四肢たたむ
歯の偏のある齡の字若葉冷
野遊びのいづれは選ぶ尊厳死
岩つばめ地熱は湯気を噴き通し

極まれば 黒辻美奈子

紺碧の極まれれば黒卯波立つ
をさなごに雛罌粟の花赤すぎる
鮎食みし夜の指先のみどりの香
春潮のさざめくに似て子の寢息
かたつむり身をたぐり寄せたぐりよせ
芽吹く木に凭れて我も芽吹くとす



地に降りて

松本圭司

黒潮の力にそだつ初鯉
羽衣のやうに香水まとひゐる
否定せず肯定もせずサングラス
妖精の王冠として夏あざみ
無一物即無尽蔵裸なり
地に降りて蛍火となる宇宙塵

孫の山椒

辻直美

栓抜にライオンの彫五月来る
履物に齒のありし頃子供の口
子の山椒孫の山椒も芽吹くかな
憲法記念日郵袋の底四角
太陽は西にさくらのなだれ咲
散る花やいづこも水の羽後の国

史蹟めぐり

望月晴美

白靴の熱もつ史蹟めぐりかな
祈ぎ事を一つに絞る初桜

蒼天へこぶし満開姉逝けり
このあたりははの故郷桃畑
いつときは鶯の木となる櫛

真水

秋葉雅治

石尊搔く鳥海山潮に引き入れて
黄金週間となり近所に耳澄ます
あかつきは真水のかをり夏つばめ
痩せぎすの舞妓におもき帯薄暑
切り岸に鳥の睥睨風五月
鉄線花ののぼりつめたる不遜かな

木偶の手

千田百里

禽あまた抱へ里山笑ひけり
この世へと枝垂れし花は葉となんぬ
春宵や見得切る木偶の手の虚ろ
抱卵の木立を抜けて忌を修す
天上の母へはピンクカーネーション
混沌と日暮の来たるつつじかな

潮鳴集

稜線

中島あきら

稜線は大地の波濤青あらし
春の汗して衛兵は瞬かず
春惜しむ連山どつと背伸びして
人はみな何かに追はれ麦の秋
雉子鳴いて坂東太郎彎曲す

羽音 掛井広通

水の輪のやがて音して春の雨
心臓の位置にポケット五月来る
名のありし星座脈打つ夏隣
キューピーの臍の弾力夏はじめ
封筒の切手に羽音みどりの夜

絵らふそく

栗原公子

鞆を漕ぐや零せし夢いくつ
花冷やピアノのキーの象牙色
春惜しむ手紙短く書きなほし
窓若葉黒鍵のみのピアノ曲
花冷や蠟涙ながき絵らふそく

冷めてゆく 林昭太郎

冷めてゆくアイロンに音花の昼
牛肉のつめたく重し夕桜
葉桜や熱持つてゐる錐の先
片目づつ春を惜しみて視力表
梅雨寒し齒科のコップのまた充つる



沖作品



能村研三 選

手紙ならやさしくなれる春灯

神奈川

大森 春子

白酒や馴初めなどを聞かれても
記憶力よき人とゐて花疲れ
わが子へも受胎告知や春の鳥
鍵盤の 一音凹む太宰の忌
孕むことかく豊かなり花うぐひ
本当のはなしも法螺も花筵

堀口 希望

源氏物語絵巻見し夜の花吹雪
高砂を口ずさみゆく臍かな
春たけのこ食みて故郷を遠くせり
クレーンの角度垂直夏近し
春愁の重さをはばす腕時計
新しきスーツ身に添ふ竹の秋
花冷や正方形に角四つ
濡れてゐる全身臍夜のマリア

千葉

篠藤千佳子

レインボーブリッジあやとりのかたち
花冷えや音楽室のベーターヴェン

東京

小嶋 洋子

陽炎へる氷砂糖の溶けるやう
夏に入る流線形のドアのノブ
銀行に四角い空気君子蘭
花びらのほころぶ風に母召さる
天界の初花に母在すらん
リリヤンの手鞠小籠に春闌くる
朴太芽かざして淋漓忌に集ふ
翠巒の風を賜り新茶汲む
気まぐれの鶏清明の水を飲む
豎琴のやうな日差しや花まつり
モーツァルトを流す搾乳若葉風
空降りてゐる天辺の枝払ひ

茨城

内山 花葉

大分

吉武 千束

沖作品 15句選評

*
能村研三

手紙ならやさしくなれる春灯 大森 春子

昨今は、あまり手紙が書かれなくなつたという。しかし今も昔も感謝の気持や礼儀を尽くすには何よりも手紙が一番。「手紙」は、メールやファックス、電話では伝えきれない気持を表現できる大切な伝達手段だ。でも「字がきれいいじゃないから」「手紙のマナーがよくわからないから」と、ちよつとしたお礼の手紙やお祝いの言葉を先延ばしにしてしまつている人が多い。私も大の筆不精の一人だが、「手紙美人」という言葉があるように、普段話すのが得意でない人も、手紙では思わぬやさしさが出てくる場合がある。

孕むことかく豊かなり花うぐい 堀口 希望

花うぐいは、コイ科の硬骨魚。長い紡錘形で、別名赤つ腹とも呼ばれ桜が咲くころが産卵期で、体に赤味を帯びてくる。釣りとより、水遊びの相手として昔よりなじみ深い魚である。釣りでは、ほとんどの餌に食いついてくるため、他の魚を捕っ

ている場合にもついでに釣れることがある。また繁殖力の強い魚で、河川の汚染にもやや強いことから各地の川にたくさん生息している。腹部は繁殖期以外は銀白色であるが、春になると雌雄ともに鮮やかな三本の赤い条線を持つ独特の婚姻色へ変化する。この時期には川の浅瀬の堆積した上砂の上で産卵をおこなうが、この句はその直前に腹を豊かに孕ませたときの描写である。

クレーンの角度 垂直 夏近し 篠藤千佳子

「夏近し」という季語は、立夏を間近にひかえた頃の感じで、街もまぶしい光の中で一層活動が活発になる。この句は都会諷詠だが、人間の動きにも夏らしい趣が出てくるときでもある。最近では私の住む市川でも地上五十階ほどのビルの建設があちらこちらで始まつたが、十五階を越えるあたりからビルの屋上に据えられたクレーンが動く姿は遠くからも見える。クレーンの角度が垂直になるときはアームが空高く立ち上がったときですでに夏空めいた大空にその動きは気持がよい。新しい街づくりの夢が膨らむ。

レインボーブリッジあやとりのかたち 小嶋 洋子

あやとりは女の子の遊びで冬の季語。季語自身がこのように比喻に使われるのは、季語の本意からはずれるという意見もあるかも知れないが、この発想力に感心して選をした。レインボーブリッジは都会の風景の中でも最もお洒落なところで、まして夜になるとライトアップされたり、イルミネーションで超近代的な都会美を感じる。細い紐を両手で操作し橋の直線・曲線を表現した。
(以下略)